

# 林京子「黄砂」における日本人娼婦をめぐる

——「日本人のくせに」

山崎信子

「棄てられた者の感覚は、そう単純でもなく、その裏側には、別の世界が育ちます。いかなれば棄民という実質に対する棄国の感性です。国家をのがれてコスモポリティックになることよりも根深く、国家を棄てるような執念が育つ」。

森崎和江『異族の原基』<sup>(1)</sup>

## 1. はじめに

「実はわたくし、日本人もどきの日本人だなと思っっているんです(笑)」<sup>(2)</sup>。二〇〇二年『すばる』四月号、「原爆文学と沖縄文学——沈黙を語る言葉——」と題された座談会において林京子は述べた。対談相手は小森陽一、井上ひさし、松下博文。同座談会のなかで林は次のようにも言明する。「わたくしの描いてる立場をはつきりさせておきますと、わたくしは、今日まで、自分の書く場所を、政

治から最も遠いところ、思想から最も遠いところに置いて、被爆者を書いてきている。それがわたくしの今日までの作品に対する、八月九日に対する姿勢です」<sup>(3)</sup>。逆説的ながら敢えて述べてみよう。イデオロギー的に自由であり、追従せねばならない政治的な教条からも自由であったからこそ、林は問題の核心にまっすぐに切りこみ、期せずとも硬直した「思想」をあらたに書きかえる。このように林作品は作者の意図を離れ「政治」に接近し介入しうるのではないだろうか。

本稿は林の用いる「日本人」という言葉に光をあて、林が「日

本人」をどのように描き、「日本人」というあたかも首尾一貫した所与の概念であるかのように理解されているカテゴリーに疑問を呈し、林の作品がいかにか「日本人」という〈全体性〉のもつ暴力を晒しているかをあきらかにしようと試みるものである。そのなかで林がしばしば懐疑の念とともに扱う「国」や「国家」という概念を浮き彫りにしたい。またそのさい、ジェンダーやセクシュアリティがどのように機能しているのかについても考察する。本稿で扱う作品は、今日まで他作品との並列や関連などのかたちで数行程度を割いて触れられることはあっても、正面から向き合い論じられる事はほぼ無かったと言ってもよいであろう「黄砂」(一九七七)である<sup>6)</sup>。

「原爆とは直接関係のない作品が、どうしてここにボンと一つ入ってきたのかということがよくわからないで、あれこれ考えているのですが」と三木卓により当惑され<sup>6)</sup>、前述の座談会でも小森陽一から「実は、『ギヤマン ビードロ』の連作のなかで、『黄砂』は八月九日との直接的なつながりがないので、どう位置づけなければならないのか迷っていました」<sup>6)</sup>とも吐露される作品。川口隆行は原爆文学における被害と加害をめぐる錯綜したナラティブを紐解きながら「黄砂」の開く可能性を読者に問いかける<sup>7)</sup>。

座談会での小森は「黄砂」に登場する「お清さん」という娼婦をめぐる次のように述べる。「林さんはご自分が被爆者として生き延びてこられた経験のなかで、日本の近代あるいは日本も参入した欧米列強の帝国主義が世界を植民地支配していくことへの思いを、一つの因果関係の中で構成された。そういうプロセスを一人の女性の運命として辿られたのですね」。しかしこの小森の解釈にたいする林の答えは「ごめんなさい。わたくしは、あまりそういう言葉は好

きではないんです」。たいする小森も「申し訳ありません。どうしても批評家の言葉づかいになってしまおう」と続き、その後も妙に話が噛み合わないまま対話はすすむ<sup>8)</sup>。

しかしこの対談のなかで林は上海の日本社会に関して次のような重要な指摘をする。「日本人のなかでも、中国人への差別だけでなく、日本人同士での差別もある。すると中国人も、そういう日本人を差別する。もう差別が層をなしています。背景にあるのは国の力だつたり人種であつたり、それは子供心にも不思議なことでした。そこにとどめておいて書きたいんです」<sup>9)</sup>。この林の発言を導きの糸として「黄砂」に描かれた幾層にもなる「差別」について考えてみることで、林が「国」や「人種」についてなにを示唆しているのかについてあきらかにしたい。またここで林が中国人や日本人のあいだの差別として「人種」という言葉を使っていることも注意しておきたい。

中国人と日本人の間にある差別を(人種差別)だと呼ぶことに抵抗を感じる一部論者の前提となるのは「中国人」も「日本人」も(同じ東アジア人)だという思考様式であるようだ。こういう認識は一見リベラルだと思われる一部批評家のなかにもみられる。しかし本稿ではそういう括りそのものが社会に蔓延る(人種主義)を隠蔽し再生産し再強化するものとみなし、「人種」とはつねに創造の過程にあり、ひいては創造の過程にある「知」であり、「知」の産出に「暴力」は伴うものだという前提において、林京子自身が使用する「人種」という言葉をそのまま引き受ける。また林の「黄砂」そのものがこの「人種」形成のプロセスとそれに伴う暴力を明らかにしているという認識が本稿の拠って立つ位置で

ある。

## 2. 「黄砂」——背景とあらすじ

一九三〇年、長崎に生を受けた林京子は生後まもなく上海に家族とともに移住する。数回の帰省があったものの一九四五年二月ついに長崎へと帰国する。原爆投下のわずか六ヶ月前である。長崎での被爆体験を描いた『ギヤマン ビードロ』のなかには、盧溝橋事件前夜から日本に引き揚げるまでの上海を舞台に、上海時代を想起するように少女の視点から少女と街の日本人娼婦「お清さん」との親交が描かれる短編「黄砂」が収められている。お清さんは日本人の経営する「料亭」には属さず春を売る女性である。

林は述べる。「上海時代と八月九日以降の人生と生命」、自身自身の「根底にある戦争と時代を呼応させ」、「一つの環」を結びたかったのだと<sup>(10)</sup>。原爆体験を扱った作品と「上海もの」と呼ばれる一連の作品を「断絶」として捉えるのではなく、一作家におけるあい異なるジャンルだと切り離して思考するのでもなく、被爆体験という光をあてつつ一連の「上海もの」を読みなおす必要がある。林は被爆後に過去を回想するような仕方では上海の日々を綴り、その上海を想起する眼差しはつねに被爆体験に貫かれたものであるのだから。またそこには「国」や「国家」への信頼ではなく諦め、ひいては「日本人」という〈全体性〉への懐疑が息づいているのではないだろうか。

ではまず「黄砂」のあらすじから述べてみよう。語り手「私」は黄砂に吹かれ、当時「シナ」と呼ばれた上海での日々を想起して

いる。上海は少女時代を過ごした地である。黄砂は記憶を呼びさます。上海で出会った一人の日本人娼婦、お清さんに想いを馳せる。お清さんとふたりで分け入った菜の花畑の静寂さを思う。お清さんと「私」が知り合ったのは昭和十二年の春、「私」が上海の小学校に入学した年である。当時、お清さんは二十三、四歳だった。昭和十二年七月七日、盧溝橋事件後、日中戦争が勃発する。お清さんの家も「私」の家もガーデンブリッジに近い虹口の入り口にあった。虹口は日本人居住区であり、橋の向こうには英、米、仏などの統治する共同租界もあった。しかしお清さんは日本人の群れからは離れ、五、六人の白系ロシア人娼婦たちと暮らしていた。その娼館ではたった一人の日本人である。日本の軍人が溢れる当時の上海には彼らを接待する日本人女性たちが、それぞれ陸軍と海軍とに区別され料亭で働いていた。お清さんとは異なり、料亭の女たちは公然と街の娼婦になつていくわけではなかった。

ある日「私」はお清さんが絹の中国服を着た男と性交しているのを目にしてしまう。ニセアカシアが植えられたお清さんの家の前に置かれたベンチで休息していた時である。春の太陽は黄砂に覆われていた。お清さんと中国服の男との性行為はふたりを取り囲む二十人近いクーリーの賭けの対象になつていた。その時のお清さんはいつもの浴衣に赤い博多織りの伊達締めという格好とは異なり<sup>(11)</sup>、髪をひさしのように結い、太もものあたりまでスリットの入った中国服を身にまとい、素肌を晒し素足にしゅすの「シナ靴」を履いていた。そして伊達締めをしていた。その姿は「異国人の目に日本女の肌を曝してはならぬ」と素足で外出することすら禁じられていた上海日本人コミュニティに属する「母たち」とは対蹠的であった。当時

「母たちはゆかたに白足袋」をはいて外出した。お清さんは日本人でありながら日本人の群れからは排除されていた。日本人コミュニティはお清さんを「国辱」と呼んだ。

約半月後、「私」はお清さんが中国人に混じって虹口クリークに架かる橋の上でコレラの予防接種を受ける場面に出くわす。当時日本人は日本人だけの指定病院で接種を受けたり、町内会に医師を呼んだりしていたのだが。その後、菜の花の野原を「私」とお清さんは散歩する。日本人の墓のように集落を作るわけでもなく、中国人の墓は思い思いの場所に人家を真似て建てられている。墓の中間つばいに天井に届くほど雑草が生え、死者のために開かれた明かりとりの窓に向かい首を束ねて伸びている。それは太陽を浴びた菜の花の緑よりも深い緑色である。「草しか見えないよ」という「私」に「それが人間よ」とお清さんは答える。続くかぎりの菜の花の黄色は地平線まで空と重なり燃え盛る<sup>(12)</sup>。のちに二人の友情は、「母」に「不良になっても知らないから」と咎められる。

抗日分子の活動が盛んになった上海では引き揚げ命令が「私」の父の勤める会社から下っていた。祖国を知らない「私」に母は「内地にいれば安全なのよ、逃げなくてもいいの」と言う。治安の不安から外出を禁じられていた「私」だが、通りを歩くゆかたに赤い伊達締めのお清さんに「後で遊びに来てくれる？ ザラメがついたピスケットをあげるよ」と低い声で言われる。「内地に帰るの？」とお清さんに訊ねられた私は頷く。この会話がお清さんとの最後になる。お清さんはその約二時間後首を括り縊死する。太った赤毛のロシア人娼婦が玄関を開ける。タンカに乗せられたお清さんの体には白衣も毛布も掛けられていなかったが、着慣れたゆかたを身につけいつ

もの赤い博多織りの伊達絞めを結んでいた。お清さんの遺体は街に捨ててある人間の赤ん坊の死体や行路病者や犬猫の死骸を集める清掃車とともに処理される。その二日後「私」たち家族は内地に帰る。

### 3. 問題設定と方法論

「被爆者としては国からの榮譽を受け取るわけにはいかない」との旨から一九七八年文部大臣芸術選奨受賞の内示を断った林京子<sup>(13)</sup>。今一度立ち止まり林のとらえた「国」について考える必要があるだろう。ここで強調しておきたいのは、〈男〉たちが大上段に構えて語る「天下国家」の「国家」ではない。あくまでも林京子という一少女が女性へと成長する過程のなかで感じ、生き、対峙し、失望し、「否」を表現するようになった「国」である<sup>(14)</sup>。林の言葉を借りるなら「政治から最も遠いところ」でとらえる「国」と呼んでもよいであろう。

林京子における「国」(ネーション)や「国」を構成する一成員となる「日本人」について理論的に考察した論文は不在だ。まずここから始める必要があるだろう。参照する理論は「排除」がいかに共同体内で機能しており、ひいてはいかなる共同体もその形成のさいには、「排除」を伴うものであることを示唆したエティエンヌ・バリバル<sup>(15)</sup>。バリバルを参照する理由は、バリバルが普遍的な価値を持つと主張したいからではなく、ナシヨナリズムにおける〈人種主義〉を重視しているからである。もう一度林の言葉を引用してみよう。「日本人のなかでも、中国人への差別だけでなく、日本人

同士での差別もある。すると中国人も、そういう日本人を差別する。もう差別が層をなしています。背景にあるのは国の力だったり人種であったり、それは子供心にも不思議なことでした。そこにとどめておいて書きたいんです」。

少女時代から林がその鋭い感性でとらえた「差別」を重く受けとめ、本稿では「排除」の論理不在で「国」(ネーション)を語るベネディクト・アンダーソンは用いない。また林の洞察力はバリバールの想像力を超える。バリバールでは、マイノリティ全体への視座はあるものの、ジェンダーやセクシュアリティがいかにネーション形成の過程において、核の部分で作用しているかについての考察がじゅうぶんであるとは言い難い。よって本論は結果的に林作品がバリバールの思索をジェンダー化しつつもバリバールを超えているかを示唆することにもなる。

では「黄砂」を読むなかで浮上するいくつかの問いを挙げてみよう。

(1) 上海日本人コミュニティに属する人々がいかに「正しい日本人」さへ「あやまった日本人」といったように日々の暮らしのなかで自己を正当化し定義づけているのか。

(2) 国(ネーション)を構成する「日本人」という、あたかも首尾一貫した所与のカテゴリであるかのように捉えられている概念を生み出すにあたり、街の日本人娼婦であるお清さんはいかなる役割を果たしているのか。

(3) 逸脱した身体としてのお清さんは、アンチテーゼとして上

海日本人社会の日本人女性、とりわけ日本人妻たちに、自分たちこそが「正しい日本人女性」であると認識させる為にどのような役割を担っているのか。

本論はネーションへの帰属意識を分析する際、人種主義、階級意識、セクシズムという要素は、錯綜しつつも互いを補完し説明しあい、「国」について思考するには、これらの要素は切り捨てるべきではないという前提に基づいている。

#### 4-1-1. 「国辱」——内部における外部

外地への移住を推進していた大日本帝国にとつて、外地に住む日本人の身体は帝国の身体の延長線上にあるものであった。よって上海の路地で肌を晒して春を鬻ぐ娼婦お清さんの行為は、帝国が理想とする身体を侵犯する。だがしかし、お清さんの逸脱する身体は、上海の日本人コミュニティに属する日本人が、お清さんとの対蹠的な関係において、自分達こそが支配的で「正しい」日本人であるのだと自己を想像し認識する役割を果たす。次の引用文を見てもみよう。

誰かが母に知らせたらしかった。母は、私が合体をみていたことを知っていた。母は、見ていたの? と聞いた。そう、と私は答えた。母は、私の目をみつめて、終わるまで見ていたの? と聞いた。そう、とまた私は答えた。母は、恥ずかしい、と言い、日本人のくせに国辱ものだわ、人前に曝すなんて、と腹

をたてた。それから、あの種の女は、内地に強制送還すべきなのよ、と言った。

この考えは、町内に住む日本人の大人たちが、お清さんに對して抱いていた感情である。外地で生活をしていると、各人が祖国を代表しているような意識を持ちがちである。特に国威が盛んな時代であるから、日本人としての意識は強い。女たちは、素足で外出することすら禁じられていた。異国人の目に日本女の肌を曝してはならぬ、という主旨からで、母たちはゆかたに白足袋をはいて外出していた。物乞いも泥棒も、貧乏でさえも国辱であり、強制送還ものであった。これらの厳しさは異国人に對する対外的な思惑ばかりではなく、それ以上に、同胞に對する目は厳しかった。日本人たちの会話には、国賊だの、強制送還だのという言葉が、しばしば使われた。子供たちでさえ友達と喧嘩すると、あなたは強制送還よ、と言った。しかし子供たちに、国を背負うという確かな意識があったわけではない<sup>6)</sup>。

ここに見られるように、上海日本人コミュニティに属する中産階級の母たちは、お清さんが体現する恥ずべき行為から自分達を切り離すことにより、自己を「純粋な」日本人女性として表象しようとする。この「純粋さ」は他の日本人妻らとの井戸端会議に興ずることで、生き生きとしたものとなりさらに力を得る。井戸端会議では自分達の見解を正当化できるのだ。噂話は「国辱」と呼ばれるものが何たるかをつねに定義づけながら広まる。お清さんの逸脱する性行為とは、日本人としての誇りを陵辱するものであつ

て、中産階級の女達は、お清さんとの対比において上海における日本人コミュニティにふさわしい構成員としての感覚を養う。まさにこういった「日常」の中で、「純粋」で「正しい」日本人像にまつわるナラティブが形成されてしまうのである。それがいかに想像上あるいは架空のものであつたとしても。対照的に、お清さんは中産階級の女性たちにより遵守され強化される規範を無視する。よつてお清さんは「あやまつた」日本人女性として位置付けられる。お清さんは、日本人が排除するためだけに必要となる絶対的な他者なのだ。その対象に反するような仕方では上海の日本人妻達は自分達を均質な日本人であると理想化しつつ表象できるのだから。

#### 4-2. 奇妙な誇り——浴衣と足袋

だがパラドキシカルにもこれら中産階級の女達は、日本の文化的コードを破つてまでも国の誇りを誇示しようとする。それは「異国人の目に日本女の肌を曝してはならぬ」という理由から「ゆかたに白足袋をはいて外出」する行為である。浴衣と足袋という組み合わせは着付けのコードからは外れてしまう。野暮ったく滑稽ですらある。しかしながら、素足を異国人の目に晒さないことによつて死守できる「国」の威厳のほう日本人にはとつては大切なのだ。この浴衣に足袋という奇妙な組み合わせは、上海に住む女達の日本人としての誇りをアイロニックに物語る。

#### 4-3. 「日本人のくせに」

上海日本人社会の女性のあいだで通用する奇妙な着衣のルールの侵犯や売春という行動様式とあいまって、お清さんと中産階級の日本人女性達とのやりとりは「日本国」というものがいかにイデオロギー的に構築されているのかを指し示している。この構造はパリバールの言葉を借りるならば、「ネーション」という連続性をもつ源流、〈自分自身として〉国民に帰属するという性質の凝縮体、つまり〈子孫の人種〉において純粋な状態のアイデンティティーについて熟慮することのできるもの<sup>(57)</sup> という思索とパラレルな関係をなしているようにおもわれる。つまりネーションとは、その構成員（国民）が〈純粋な〉家族関係のような類似性を、たったひとつの源流に向かつて互いに投影し合うことによつて姿を現し始めるのであり、さらには、ネーション（国家）の構成員は連続する系譜学的な全体性を形成し始めるという洞察である。

よつて、人種の〈純粋性〉や〈首尾一貫性〉はネーションを概念的に立ち上げるために重要な役割を果たす。上海日本人コミュニティの日本人にとり、人種化された行動様式とともに人種化されたナシヨナリズムが立ちあがり、「日本人」たる人種が作りあげられる。そうすることによつて日本人たちは他の人種とはあい異なる存在として純粋で理想的な「日本人」をかたちづくっていくのである。お清さんの「日本人」としての〈首尾一貫性〉は、語り手の母親の次のレトリックが雄弁に物語るよう、疑問に付されている。

「日本人のくせに国辱ものだわ」<sup>(58)</sup>

「くせに」はしばしば非難の気持ちを表現する。お清さんに対

して、非難というナシヨナリスティックでヒステリックな感情が表現される。「くせに」は、ある集団やコミュニティ内で通用する規範が破られたり、コミュニティ内のロジックに反するような言動を何者かがとつたりする時に用いられる。お清さんは、ナシヨナリズムに彩られた上海日本人コミュニティ内で通用するコードに照らし合わせた際、「正しい」と信じられている常識や直感を揺さぶり、日本人コミュニティの〈純粋性〉に亀裂を生じさせているのだ。「日本人のくせに」という表現には上海日本人社会に蔓延る集団的な傲岸不遜が透けてみえる。

日本人女性らのあいだで遵守される共通のコードから乖離してしまってお清さんは、その存在そのものが女達の規律的な眼差しから矯正あるいはなんらかの対処を講ずるべき対象となつてしまう。「同胞にたいする目は厳しかった」時代に、内部における外部であり逸脱したお清さんは「国賊」や「強制送還」というレベルの非難の領域に置かれてしまう。この規律的で矯正的な眼差しは、お清さんをその最下層として位置付けるヒエラルキーを伴う暴力的なものである。お清さんは〈正しい〉日本人女性達によつて要求される基準をけつて満たすことがない。

よつて中産階級の日本人女性達がお清さんの身体を恥じ排除しようとする仕方は、〈純粋〉で〈真の〉日本女性としての源泉を焦がれる欲望を明るみにする。そのような源泉など投射によつてしか生まれない架空の産物であるにもかかわらず、日本出身のお清さんの所作や振る舞いは、穢れなき日本人像を追い求め保持したいと願う女達の規範を犯すものなのだ。上海中産階級の日本人コミュニティの女達にとり〈良き妻〉、〈良き母〉であることは日本的な女

性らしさの中核をなしている。こうやって人種はつくりあげられてゆく。捏造と呼んでも過言ではないのかもしれない。

ここでもう一度バリバールを参照してみよう。バリバールは述べる。「ネーションの統一は人種を軸」にしており、「人種概念」とは「いかなる墮落や退廃にたいしても抵抗するよう守られなければならない遺産」なのである。<sup>(9)</sup>「国辱」と烙印を押されたお清さんは「墮落」であり「退廃」であり、日本人社会がお清さんという「国辱」に一致団結して抗うように向き合い、その抗いのプロセスのなかで人種のみならずナショナリズムまでも生み出していくような存在なのである。ナショナリズムが立ち上がるさいの排除の力というもの、外国人という外部に対してだけではなく、自国民という内側に向けても働くものなのだ。そのことをお清さんは身をもって証明している。

#### 4-4. お清さんのいたみと均質性という架空のアプリオリ

お清さんは五、六人の娼婦たちと、この家に住んでいた。仲間の娼婦たちは白系ロシア人で、日本人の女はお清さんが一人である。日中戦争の開戦を前にした上海には、日本人の軍人が溢れており、それにともなつて、娼婦たちの家も、街の方向にあった。しかし日本人の娼婦は珍しかった。彼らを接待する日本人の女たちは、日本人の料亭で働きながら、陸軍、海軍に区別されて管理されていた。勿論、名目は娼婦ではなく、金銭の取り引きが行われていたかどうか、私は知らない。

ずれにしても、お清さんのように公然と街の娼婦になつて、売春を専業にしている日本女性の話は聞かなかつた<sup>(10)</sup>。

上海の路地で春を鬻ぐお清さんの身体は、〈国〉、〈階級〉、〈人種〉といった境界を侵犯する。お清さんは中国人クローリーの眼の前でも肌を晒して身体を売り賭けの対象になる。「料亭」という名のもと、「海軍」や「陸軍」の日本人男性の客をとつていた女たちとお清さんは一線を画する。なぜなら料亭の女の身体は大日本帝国の管理下にあるのだから。上海日本人コミュニティの社会的階層の中ですでに下層に置かれている料亭の女たちよりも、お清さんはさらにその下に位置づけられる。そしてお清さんの住居も隔離されている。お清さんはロシア人娼婦たちとともに暮らし、住まう娼館のなかでは唯一の日本人である。前に述べたように、「異国人の目に日本女の肌を曝してはならぬ」という「日本人としての意識」のもと「ゆかたに白足袋」という滑稽な格好をしてまでも日本人としての誇りを守ろうとする日本女性とは対蹠的に、お清さんはクローリーたちの目の前で大胆なドレスを身にまとい賭けの対象として絹地の中国服を着た男と性交をする。その場面を見てみよう。

お清さんは中国服を着ていた。ふだんの日には、お清さんはゆかたに、赤い博多織りの伊達巻をしめている。中国服を着ているお清さんを見るのは、はじめてである。髪も、全体をひさしのように張り出して結っている。裾の脇が、太ももの辺りまで切れ上がった中国服の中は、素肌である。そして、素足にしゅすの「シナ靴」をはいている。びん付け油で結いあげた頭部



に比べて、お清さんの素肌は構える装いがなかった。節のない、しなやかな腕を自然に垂らして、お清さんは玄関に寄りかかって立った。絹地の服を着た男が、ゆつくりと長椅子に近づいて行く。男の動きを見て、お清さんも、長椅子に向かって歩いて行く。それから椅子の端に、両足を揃えて坐った。男も坐った。坐ると同時である。男は、いきなりお清さんの腰を抱いて、引き寄せた。左手で抱き寄せて、長椅子の上に押し倒す。倒されたお清さんは、両手で男の脇腹を叩く。五本の指をバラバラに開いて、冗談とも本気ともつかない表情で叩く。男は、お清さんの手首を片方ずつつかんだ。それを両手で束ねて、右手でつかむ。お清さんの両手の自由を奪うと、お清さんの両脚を、自分の脚の間に抱え込んでしまった。

お清さんは静かになった。男も静かになった。ウエイ、ウエイ、とクーリーたちが囁きだした。囁しながら、クーリーの一人が重なった男の背中を力一杯に叩く。それを合図に、男が長椅子の上からはね起きる。続いて、お清さんが男に真似た身軽さで、はね起きた。

素早く服のしわを両手で伸ばして、お清さんはガーベラ色に塗った唇をゆがめて、男に笑いかけた。男が、両手を胸に合わせて、お清さんに一礼した。

クーリーたちは、狂ったように手を叩いた。一百、両百、とせりあつていた金を二人に投げて、拍手を繰り返す。足元に散らばった銅貨や紙幣をみて、声をたてて男が笑った。お清さんも、こぶしで自分の腹を叩きながら、大声で笑う。

賭は、二人の合体にあるらしかった。男が攻めきるか、女が

守り抜くか。勝負はお清さんの負けで、あっさりと終わった。私は、はじめてその時に、男と女の合体をみたのである。見た、というだけで、それがどんな意味を持つ行為なのか、私にはわからなかった。心に残るほどの、強い印象でもなかったが、太陽の光の中で行われた合体は、稲穂の上をすらなつて飛ぶ。連結トンプスを眺めているように爽やかだった。

クーリーたちは、いなくなっていた。絹地の服を着た男もいない。私は、人気がない歩道に立つて、お清さんを眺めていた。お清さんは私に背を向けて立っていたが、背中に視線を感じたらしく、ふり向いた。そして私に気がついた。お清さんは驚いた表情で、「あんた日本人の子?」と聞いた。私は、そう、と答えた。「見たの?」とお清さんが聞いた。そう、と私は、はつきり答えた。お清さんは暫くの間、黙っていた。それから、ふーん、と言った<sup>(9)</sup>。

この後、お清さんと「私」は河に向かって歩く。お清さんはつぶやく。「上海丸」や「長崎丸」という五、六千トン級の連絡船ではなく、小さな船のまわりに木の板で波よけをつければ日本に帰れるのかと。不可能な夢想である。不可能を想像することであらかじめ祖国への郷愁を絶とうとするお清さんのかなしみを「私」は察する。お清さんは、日本と上海とを往復する連絡船の中にも故郷にも自分の居場所がないことをじゅうぶん理解していた。

心をもつ人として尊重されることのなかったお清さんの寡黙や沈黙は、性愛のぬくもりや優しさそして思いやりを剥ぎ取られた女性のいたみを物語る。男たちに裸体をさらすお清さんの内奥は男たち

には閉ざされている。だからと言って日本人コミュニティーの女たち  
に開かれていたわけではない。むしろ両者のあいだには埋めがたい  
断絶があった。のちにお清さんとの親交を知った母に「私」は咎め  
られる。「不良になつても知らないから」<sup>(2)</sup>。

クローリーが囁し立てるなかで売春をする場にまさか「日本人」  
の少女がいるとはつゆとも思わず驚いたお清さんは、「あんた日本  
人の子？」と「私」に訊ねる。この問いは、この二人が会話を交わ  
すこの場（いま・ここ）が、上海日本人共同体の（まつたき外部）  
であることを示唆している。

感傷は抑えもう一度バリバールに戻つてみよう。バリバールにと  
つて人種とはつくられたものであり、共同体の構想を可能にするフ  
イクションである。人種とは生物学的なものではない。人種とは人  
種を軸とする共同体の構想を可能にする「象徴的な種」なのであ  
る<sup>(3)</sup>。お清さんはこの「象徴的な種」を陰画のように映し出す。お  
清さんの逸脱する身体は、理想的な日本人の身体というフィクション  
を成立させるための非理性となるのだ。大胆にスリットの入つたチャ  
イナドレスに身を包みクローリー達に肌を晒し中国人と「連結トシポ」  
になつたお清さんは、弁証法的に「象徴的な種」をあぶり出す。  
人種的な日本のナシヨナリズムは「象徴的な種」を通じて姿をあら  
わす。換言するなら、お清さんは誰が理想的な日本人でないのか、  
という具体例を身をもって示している。これほどまでにナシヨナリズ  
ムとは（人種的）なものである。

この上海の日本人共同体はその内部で（人種的均質性）というフ  
イクションめいたアプリアリを必要とする一方、他の人種的な集団  
にたいしては、外へと向かう人種の差異を投影する。興味深いこと

にこの力学はその論理的破綻を露呈することで内部崩壊してしま  
う。「強制送還」などの言葉に代表されるように、望まれぬ逸脱と  
して負の烙印というステイグマを負わされるお清さんは、論理の破  
綻によつてしか達成できない人種的な統一性という投影をつまびら  
かにする。そして、共同体がお清さんの日本人性を否定すればす  
る程、共同体は皮肉にも、お清さんが日本人であることを肯定し  
てしまつているのだ。もう一度繰り返し述べておこう、ここで人種  
と言うとき、生物学的な人種は意味しない。排除の論理を基調と  
したフィクションと心理的なナラティブと投影に彩られたものでは  
ある。

人種が人種主義という概念を生むのではない。その逆で人種主義  
が人種を生むのだ。さらに次の文をみてみよう。虹口クロークに  
架かる橋の片側で、中国服を身に纏い中国人ばかりの列に並びコレ  
ラの予防接種を受けるお清さんを描いた場面である。

橋や街角で予防接種を受けるのは、中国人に限られていた。  
お清さんは、その中国人ばかりの列に並んでいたのである。合  
体の日に来ていた中国服を着て、列が一步進めば、お清さん  
も一步進む。中国服を着ているお清さんは、並んでいる人たち  
と少しも変わらない。前後に並んでいる中国人たちも気がつか  
ないらしい。（中略）

三十分近く待たされて、やっとお清さんの番になつた。股を  
開いて仁王立ちしている軍医が、お清さんの左腕をつかんで、  
消毒もしない腕に、いきなり注射針を刺した。一瞬の間に液を  
注入すると、手荒く針を抜く。針の先が磨滅していたらしく、

抜き取った針の跡から、黒い血の玉が吹き出た。痛い？と私が聞いた。軍医が、う？と首をかしげて、「あんたも日本人か」とお清さんに聞いた。お清さんは答えなかった。中国人たちと同じ仕草で、掌で血の玉を腕にすり込むと、家とは反対の方向に歩き出した<sup>(34)</sup>。

お清さんは、日本人であるという概念とは矛盾する行為に出る。

お清さんはアプリアオリに日本人らしいとみなされる行為ではなく、中国人的だと考えられる行為を演ずる。お清さんに体现されている矛盾の解決は上海に暮らす日本人にとって必然であった。人種主義に基づくナシヨナリズムは上海日本人共同体に生命を吹き込むのであったのだ。小森との対談で林がつぶやいた言葉を今一度引用してみよう。「日本人のなかでも、中国人への差別だけでなく、日本人同士での差別もある。すると中国人も、そういう日本人を差別する。もう差別が層をなしています。背景にあるのは国の力だったり人種であったり、それは子供心にも不思議なことでした。そこにとどめておいて書きたいんです」。

## 5. むすびにかえて

ふるさととはあつても故郷には帰れる場所もなく、くにに向かう船にも自分の居場所はないことを悟っていたお清さんは、娼館の屋根裏部屋の梁に赤い博多織りの伊達締めを吊り首を掛け自死を選ぶ。商品化された身体を生き、汚い生／性として扱われ、日本人女性として（正しい）と見做される（孕み、産み、育てる）という構造

の外部に生き、人間としての尊厳をひき剥がされ、国家に棄てられ、自己を騙しながら生きたお清さんには、死後の引きとり手もおらず弔う人もなく行くところがない。お清さんは犬猫や行路病者の屍体を収集する清掃車でその亡骸を処理される。この最期は、お清さんの生きた（裸形）の生のかたちを沈黙のなかに物語る。さらには、日本人社会だけではなく中国人との関係においてもお清さんが味わったであろう差別的構造が透けて見える。

この世を去る二時間前にザラメのついたピスケットをあげるからと「私」を娼館に呼んだ時、お清さんの脳裏にはすでに縊死という可能性がよぎっていたことであろう。だからこそ最期の別れとして、この日本人共同体の（まったき外部）となる自死の場に、心を持つ人間として、優しさで接してくれた「私」にいて欲しかったのではないだろうか。その悲痛な生と死を感じとることのできるただ一人の人間として。そして「私」にとつてもお清さんは「町内の日本人のなかで一番優しい、いい人」<sup>(35)</sup>だったのだ。

お清さんが「うちも日本人は嫌いな」<sup>(36)</sup>という素振りを見せる時の「日本人」とはいったい誰であったのだろうか……。それは、植民地主義とともに拡張する帝国日本の近代化の過程で、国威を背負い排除の論理を基調として弁証法的につくりあげられた日本人だったのではないだろうか。お清さんは日本人が日本人であるという意識を形成するさい、排除されるためだけに必要とされる内部における他者だったのだ。

冒頭で述べたように、林京子も自分自身のことを「日本人もどきの日本人」だと自嘲気味に表現したり、島村輝との対談では自分のことを「帰化人」に喩えたり、日本に帰国してからは「日本

にはなかなか同化できませんでした」とも語る<sup>(57)</sup>。このように林は「日本人」なるものへの違和感を隠さない。林は「日本」や「日本人」そして「日本国家」を所与のものとして無批判に受け入れるのではなく、引つかりを感じればいつたん立ち止まり、その引つかりをあたためたためそこで覚えたざらつきや落ちつかなさや居心地の悪さを描写した。本稿で論じてきたように、「日本人」であることのフィクション性や胡散臭さそしてその暴力性を、少女から娘へと成長していく上海で出会った娼婦・お清さんとの親交をとおし嗅ぎとるようになっていたからこそ、生死を彷徨った長崎での被爆体験や、その後ずっと逃れ得ない悔しさを通じてさらに痛感するに至った境地ではないだろうか。「黄砂」が林の他作品に比べると軽視されてきたことは否めない。しかし「黄砂」とはそれじたいで不気味な強度を放つ作品なのである。

もう一度「黄砂」に戻ってみよう。戦禍にさらされないようにと上海から内地に引き揚げる時、祖国を知らない「私」に母は説く。「内地にいれば安全なのよ、逃げなくてもいいの」と<sup>(58)</sup>。しかし安全なはずの内地・長崎で「私」は被爆する。一九四五年八月九日のことであった。今や母の言葉はうつろに響く。お清さんだけでなく、「私」も国家に裏切られ蹂躪され見棄てられたのだった。そして友の多くを失い、次世代に受け継がれる原爆症への恐怖から孕んだ子供を墮胎することすら考え<sup>(59)</sup>、子が生まれてのちも怯えながら子育てをし、決して消え去ることのない原爆症との精神的そして肉体的な苦闘の日々のなか、「核」について考え書き続ける。そして二〇一一年三月の福島での原発事故。

福島以後、国家はそれまで否定してきた「内部被曝」という言

葉を初めて用いた。林ら被爆者にたいしてはかたくなに否定してきた症状である。あらためて林は国家に欺かれていたことを痛感する。体調の悪さもあり躊躇はあったもののそのためらいを断ち切り、「ここで行かねば本当に偽善者だ」とみずからに言い聞かせ、二〇一二年七月十六日、東京・代々木公園にて大江健三郎らの呼びかけにより始まった「さようなら原発十万人集会」に参加する。そして国家に「否」を突きつける。国家権力のつねに介入する「核」について「原爆と原発はイコール」ときっぱりと言いつつ<sup>(60)</sup>。一九七八年に「被爆者」として「国からの榮譽」である文部大臣芸術選奨受賞の内示を辞退したこともふくめ、この間林京子を貫いている軸は日本国家への妥協をゆるさぬ厳しいまなざしである。外部からだけではなく、日本人内部からの日本に対する批判は、社会の変革のために必要なのだ。「国」が弱者にたいし宿した暴力を静かにしかし確かな筆致で書きしたためた「黄砂」の出版は、辞退前年の一九七七年であったことをもう一度確認しておきたい。

女性へと成長した林は黄砂の舞うなか大陸のお清さんに想いを寄せる。林の胸のうちで「哀しさの核」となったお清さんである<sup>(61)</sup>。黄砂は中国大陸奥地から黄海を渡り、朝鮮半島を越え日本へと運ばれてくる。黄砂には異郷も他郷もない。境界を自由に越える。黄砂はお清さんとコントラストをなす。自由に移動する黄砂とはあい異なり、お清さんは故郷へと続く海を渡ることにはなかった。お清さんがみつめていた河も同様にだ。水に国境は引かれていない。お清さんにとつて故郷とはもはや不可能な（テロス）となった。「国家」の大きな力はお清さんの帰郷をゆるさなかった。

お清さんと出会った当時には性愛も知らず、その身を娼婦として

売ったり売られたり賭けの対象にされたり、自分を殺して商売だからと招かれざる客をその肉のうちに受け入れることも無かった林京子が、言葉ほんらいの意味でお清さんに出会えたのは、長崎で被爆し、命の尊厳を踏み躪られ（裸形）にされ国家に見棄てられ、その傷跡を幾度も辿りなおし、「日本国」という暴力を孕む全体性の覚めた眼差しを育み慈しむことができた時にはじめて可能になったのではないだろうか。そしてその時やつと、上海の自死の場・娼館では誰も弔うことのなかったお清さんの死を悼み弔うことができたのかもしれない。身を以つて人間の意味を教えてくれたお清さんの死を。

## 注

1 森崎和江『異族の原基』、大和選書、一九七一年、一三七頁。

2 林京子、松下博文、井上ひさし、小森陽一「原爆文学と沖縄文学——沈黙を語る言葉——」、『すばる』集英社、二〇〇二年四月、二〇八頁。

3 前掲「原爆文学と沖縄文学」、二一四頁。

4 たとえば川村湊は「黄砂」の次の部分についての解釈を試みる。「賭は、二人の合体にあるらしかった。男が攻めきるか、女が守り抜くか。勝負はお清さんの負けで、あっさりと終わった」（二六六頁）。

もちろん、私たちはこの文章に「中国人の男が攻めきるか、日本人の女が守り抜くか」という、余計な注釈をつけずにはいられないのだ。（中略）むろん、そうした彼女の境遇や立場を（私）が十全に理解できたはずはないが、（私）はそこで最も下層の部分でつな

りあい、犯しあう「日本」と「中国」との関わりを見たはずである。それは「日本人」であることと、「女」であることの二重性の痛みとして、（私）の感性の柔らかなヒダのなかに折り畳まれたことは疑いないのだ。（中略）林京子の小説の主人公の（私）は、こうした「お清さん」という日本人ヤーチーを通じて、上海の路地に生きるこの原形を見たのであり、それは「男」たちの、「中国人」たちの、「日本人兵士」たちの目に曝されながら、「女」が生きてゆくという、普遍的な構図とさほど変わらないものだったのである。

川村の解釈はお清さんという路地に生きる娼婦に寄り添おうとしてはいるものの、その解釈のマチズモが見え隠れする。果たして「犯しあう日本と中国」という次元の話なのだろうか。このようなあたかも互角の二者間の「犯しあ（い）」という表現では、あらかじめ前提となっている日本と当時「シナ」と呼ばれた中国との間に横たわる非対称的な地政学的な力関係や、腕力という側面から見たさいの男女間の決して対称的ではない関係を無視していることにはならないか。じつさいお清さんは「あっさり」と負ける（二六六頁）。また、お清さんという職業的にも階級的にも特異な女性の生涯を、川村が指摘するように「女」一般が生きていくという「普遍的な構図」に回収してしまうと、それぞれの女が生きた痛みや葛藤といった個々の「生」のかたちが抹消されたり、上書きされたり、抽象化されたりしてしまう。なお、川村の言う『日本人』であることと『女』であること」の「痛み」の内実は不明瞭なままである。川村の述べる「日本人」とは誰なのか。さらには「女」とは。定義づけ無しに言葉が上滑りしてしまい意味不明な文章になっていることを指摘せざるを得ない。川村湊「『シャンハイ』」

された都市」、川村湊自撰集4巻アジア・植民地文学編』、二〇一五年、五一―五二頁。

5 木下順二、高橋英夫、三木卓「創作合評 『未清算の過去』 について」、『群像』第二七号、一九七八年三月、二八八頁。

6 前掲「原爆文学と沖縄文学」、二三四頁。

7 川口隆行は「原爆文学という問題領域」の「被害と加害のディスクリール——戦後日本と『わたしたち』」と題された論考において次のような重要な問題提起をする。

「野に」は、(中国大陸から黄砂が吹いて)きた四月の思い出から語りだされ、やはり(中国大陸から黄砂が吹いてくる)来春を心待ちにする場面で締めくくられる。(黄砂)とは、(私)が少女時代を過ごした大陸の記憶の隠喩にほかならない。原爆体験を中心に描いた『ギヤマンビードロ』には「黄砂」という章が挿入されており、日中戦争直前の上海を舞台に、ディアスポラなど呼ぶより「非国民」と言つたほうがふさわしい娼婦の「お清さん」との交流の日々が語られる。(そこにいあわせた私たちが、どんなに悪い罪を犯したのであろう)という(私)の言葉がやはり偏つた、平衡を欠いたものだとして、それとは全く異なる歴史的文脈からなされる物語を、(黄砂)は運んでこないとも限らない。両者の(私)の言葉が交わり、対話を始め、論争に及んだとき、どのような亀裂や断層が「わたしたち」に出現するのだろうか。(川口隆行『原爆文学という問題領域』創言社、二〇〇八年、二〇一頁。)

なお、(そこに)いあわせた私たちが、どんなに悪い罪を犯したのであ

ろう)というナラティブは『ギヤマンビードロ』最終話の「野に」で、「そこに)いあわせた私たちが、どんなに悪い罪を犯したのだろうか」に呼応するものである。詳しくは、前掲『原爆文学という問題領域』一九九―二〇一頁を参照されたい。

8 前掲「原爆文学と沖縄文学」二三四―二三六頁。

9 「原爆文学と沖縄文学」二三六頁。

10 『林京子全集』七巻、日本図書センター、二〇〇五年、四七二頁。

11 林は「黄砂」のなかで繰り返し「赤い博多織り」の「伊達巻」と記述しているが、いわゆる「伊達縮め」のことであろう。本論では混乱を避けるため明らかに「赤い博多織り」のものを指しているときは「伊達縮め」で記述する。なお『林京子全集七』に納められたエッセイ「だてまき」(九九―一〇二頁)でも自警団から除外され「ゆかたを着て、赤いダテマキを胸高にしながら、娼婦の家の玄関に立っていた」お清さんのことが語られる。このエッセイでは「ダテマキ」とカタカナで記される。「だてまき」でのお清さんは、林が小学五年生頃からの記憶に基づく姿となっており、二十七、八才に設定されている。林京子がお清さんと出会うから数年間経過していること、お清さんの正確な生年月日は知る由もないことを考慮し、林作品に馴染みのない読者が混乱しないよう、あらためてここに記しておきたい。なお、「黄砂」で「母」も含む日本人の女たちが噂する「伊達巻で、首を吊つていたらいいですね」、「おそろしい、伊達巻は丈夫なものね」という表現は、エッセイ「だてまき」では「博多織は丈夫ですね」となっている。母たちが「赤い博多織り」の伊達縮めを「伊達巻」と呼んでいたか否かを確かめることはできないが、林京子の遠い記憶のなかでは「ダテマキ」という響きの日本語なのであろう。

- 12 林京子の「自然」描写は「エコクリティシズム」等との親和性などにおいても、あらためて論じる必要があろう。
- 13 元『群像』編集長、橋中雄二による解説「研がれる人間」を参照された。橋中雄二『研がれる人間』、『林京子全集』一卷、日本図書センター、二〇〇五年、四八〇頁。
- 14 〈男〉の描く上海でなく、林京子という〈女〉の描く上海について考えを深めるにあたり、小沢節子氏との対話から多くの示唆を得た。男の描く上海、男の語る上海、そしてそこから語られ始める「国家」。武田泰淳や堀田善衛などが例として挙げられよう。なお、林京子の中編「谷間」にも、草男というリベラルで知識人的な所作をみせつつも、戦前の家父長的な性役割、性規範、性別役割分業等の固定観念から逃れているとは言い難い男が描かれる。草男も上海に暮らした男であった。林京子「谷間」、『林京子全集』三巻、日本図書センター、二〇〇五年。
- 15 Etienne Balibar and Immanuel Wallerstein, *Race, Nation, Class: Ambiguous Identities*, trans. Chris Turner (New York: Verso, 1991), バリバールの日本語訳も出版されているが、本稿では英訳を使用した。よって本論で使われる表現は著者が日本語に訳したものである。本稿はとりわけ第一章第三節の「レイシズムとナショナリズム」、第二章第五節「ネーションのかたち——歴史とイデオロギー」に影響を受けている。
- 16 『林京子全集』一卷、日本図書センター、二〇〇五年、一六七頁。
- 17 前掲*Race, Nation, Class: Ambiguous Identities* 五九頁
- 18 前掲『林京子全集』一卷、一六七頁。
- 19 前掲*Race, Nation, Class: Ambiguous Identities* 五九頁。
- 20 前掲『林京子全集』一卷、一六三頁。
- 21 前掲『林京子全集』一卷、一六五—一六六頁。
- 22 前掲『林京子全集』一卷、一七〇頁。
- 23 バリバールはこの「象徴的な種」を“symbolic kernel”と呼ぶ。詳しくは次を参照。前掲*Race, Nation, Class: Ambiguous Identities* 九九頁—百頁。
- 24 前掲『林京子全集』一卷、一六八頁—一六九頁。
- 25 『林京子全集』七巻、日本図書センター、二〇〇五年、一〇〇頁。
- 26 前掲『林京子全集』七巻、一〇〇頁。
- 27 林京子、島村輝『被爆を生きて——作品と生涯を語る』、岩波書店、二〇一一年、四一五頁。
- 28 前掲『林京子全集』一卷、一七〇頁。
- 29 林が妊娠八ヶ月の時に長男を「中絶しよう」と思いつめた件にかんしては次を参照。「核と命」に向き合う『原爆と原発は同じ』と訴え、『東京新聞』二〇一七年三月二日。
- 30 「絶望から希望へ 林京子さんに聞く・上」、『長崎新聞』二〇一二年八月七日、「絶望から希望へ 林京子さんに聞く・下」、『長崎新聞』二〇一二年八月十日、「長崎で被爆 作家・林京子さんの思い」、『東京新聞』二〇一三年、一月二一日。
- 31 前掲『林京子全集』七巻、一〇二頁。

#### 付記

本稿は二〇一三年十二月、日本近代文学会国際研究集会において「越境するメディア——東アジアへのまなざし」と題されたパネルにて、上海の日本人コミュニティが「日本」という全体性をつくりあげるさいに、排除するためだけに必要とされ「国辱」と呼ばれる娼婦・お清さんを考察した論文の論旨を変更せず加筆したものである。二〇一三

年の段階ではオリジナル原稿は英文であった。よって二〇一六年十二月、第五十一回原爆文学研究会では、原稿を日本語に翻訳しなおしたうえで発表した。発表後、ご教示いただいた方々にはあらためて感謝の意を表しておきたい。なお、本稿を完成するにあたり、リーハイ大学の Humanities Center と Paul J. Franz, Jr. Pre-tenure Faculty Award の助成を受けた。